Brian Evenson

吉　田　恭　子

京大英文学会 ALBION 復刊 54 号（2008. 10.）抜刷

© Kyoko Yoshida

—研究ノート—

Brian Evenson

2006年11月，ブラウン大学で，イラン人作家Shahrnush ParsipurとShahryar Mandanipour，ノーベル賞受賞の知らせ間もないOrhan Pamuk，そしてSalman Rushdieを招いてFreedom-to-Write Literary Festivalが開催されたとき，朗読会で聴衆にラシュディを紹介したのはまだ30代の文芸科ディレクターBrian Evensonだった。控えめながらも尊敬をこめてラシュディの創作活動を称えたエヴェンソンの紹介は，イスラム文化圏でなんらかの葛藤がある作家たちの集いにふさわしいものであるとともに，それ以外に共通項がない作家らが，創作の自由という美名の下米国賛美に利用されることを牽制する思慮深いものであったと思う。しかし，エヴェンソンと彼の小説作品を知る人々は，壇上に並ぶふたりを見てまた別の感慨を抱いたに違いない。そのひと月前に出たエヴェンソンの長編*The Open Curtain*（Coffee House）を読んで彼の身の安全を危ぶんだ人は少なくなかったからだ。

ここで彼の第一短編集*Altmann's Tongue*（Knopf, 1996）をめぐる経緯をふり返っておこう。今手元にあるのはネブラスカ大学出版局の西部関連文庫Bison Booksからの2004年版で，初版になかったO. ヘンリー賞受賞作"Two Brothers"とともに，哲学者Alphonso Lingisによるまえがきと本書出版のいきさつについて作家本人によるていねいなあとがきが収録されている。

モルモン教徒として生まれ育ったエヴェンソンは，聡明な青年だったのだろう，若いときから教会の役職を務めており，伝道で派遣されたフランスでベケットをはじめとするヨーロッパ文学と出会う。信者と結婚したの

© Kyoko Yoshida

ち，ワシントン大学（州立）で批評理論と18世紀文学を専攻し博士号を取得，ブリガムヤング大学に教職を得，書きためた短編を集めて本書を出版したところ，大学当局への匿名の投書がきっかけで，自らの作品の正当性を釈明するよう強いられ，大学の理解を得られぬまま，教職を維持するためには小説の執筆をあきらめるよう言い渡される。結局幸運にも他大学に職を得て，多作な作家・翻訳家としてのスタートを切るわけだが，その後教会と妥協の試みもむなしく，2000年には本人の希望により正式に破門されている。

そのいわくつきの『アルトマンの舌』，ひと言で言えば，人を殺す話ばかりを集めたものだ。エヴェンソンは，殺される恐怖ではなく殺す恐怖に固執する。わたしたちはだれもが殺人者だ。殺されたいと思うことはなくても，殺したいと思うことはしばしばで，夢の中では，殺されるよりもむしろ殺している。何度も，何度も。現実とは少しずれた夢のような物語世界の中で，エヴェンソンの小説は殺人の記憶を呼び起こす。そこには猟奇も，残酷描写が極まり生ずるリリシズムも，虚無的美学もない。この短編集に倫理性，政治性があるとするなら，暴力の被害者ではなく，加害者であるさまを想像するよう読者に常に強いる点だろう。

現実と幻想の境界に起こる残酷行為またはその予兆を描く作品群は，本来なら大学ベースの実験的文芸誌を中心に，限られた読者層と一部ホラーファンにしか読まれなかったはずで，それを，そもそも小説をほとんど読まない人々の前で弁護しなければならなかったとは，どれだけ不毛な経験であっただろう。しかしこの筆禍を経て，エヴェンソンは自分の書きとめる虚構のひと言ひと言に現実の重みがあることを実感するようになったのだという。

エヴェンソンは普通なら慎むだろう自作解説を含めてこと細かなあとがきを書く作家で，それは好き好んでというより，彼の特殊な事情に由来している。しかし，その特殊性にこそ，今日周辺文化となり，ともすれば不審の目で見られかねない小説の立場が端的に現れていないだ

© Kyoko Yoshida

ろうか。

第9作目にあたる最新作 *The Open Curtain* は，ブリガム・ヤングの孫ウィリアム＝フーパー・ヤングが関わったとされる1902年の儀式殺人をモチーフに，現代のユタを舞台にした長編。モルモンの高校生 Rudd は，父の死後異母兄との出会いをきっかけに，現実の揺らぎにとまどいながら，儀式殺人の神秘にひかれてゆく。宗教の奥底に潜む暴力性に触発され，彼の世界が徐々に崩壊する軌跡を淡々と時に幻想的に物語るこの小説は，モルモンの閉鎖性，陰の歴史を正面から扱い，1980年代当時の秘儀をかなりつまびらかにしている。特に婚姻の儀式に詳しい。ラッドの結婚式はこの小説のタイトルにまつわる前半のクライマックスだが，残酷なことはなにひとつないにも関わらずこんなにおそろしい婚礼シーンは他に覚えがない。読んでいるとあまりに取り返しがつかない感覚に襲われて，自分が結婚したことさえ思わず後悔してしまうほどである。

しかしより不安を煽るのは本書の自己言及性，現実との結びつきだ。モルモン教とその儀式は実際のものであり（現在はかなり変更されたらしい），不可解な殺人も歴史上の出来事である。モルモンの掟を破った者，その奥義を他に洩らした者は，血の犠牲を覚悟すべきことを，儀式そのものが暗示している ―― というのがこの小説の解釈だが，それを推し拡げれば，この小説の作者も破戒を償うよう強いられる可能性がある ―― かもしれない……。過去のいきさつを知る読者はなおさら想像をたくましくしてしまう。

あとがきを読むとその不安も少しはやわらぐものの，わたしたちはアメリカの原理主義，偏狭性が野蛮なやりかたで人の命を奪いかねないことを重々承知している。国家権力による宗教的死刑はなくても，私刑は横行しているのがこの国の実態だ。そして「自由の国」の過去と現在を語るのにさけて通れないのが暴力である。アメリカ小説とは暴力小説にほかならない。エヴェンソンはたじろがずに，自らを育んだ文化とそのことばを話す人々への愛情も込めて，自分の生まれ育った環境が破壊的衝動に支配され

© Kyoko Yoshida

ることを暴きだす。

エヴェンソンの世界は取り返しのつかない世界である。直裁で冴えた言葉遣い，一見不明の時間と場所，予想を裏切る展開を追っていくうちに，気付けば後戻りできない場所にいる。たとえば2ページに満たない短編「アルトマンの舌」。冒頭でアルトマンはすでに死んでいる。語り手が殺人者だが，なぜ殺したのかは明らかにされない。その場に居合わせたHorstもあっけなく殺されてしまう。"There are two types of people ... type Horst and type Altmann. All people are either Horst or Altmann." アルトマンタイプの人間とは，殺されてしかるべき者，殺すか殺さないかの二者択一で迷うことなく殺すべき人間。ホルストタイプとは殺すべきか生かすべきかはっきりしない人間。人生を厄介にするタイプである。とはいえ，この時点で語り手は前者ばかりか後者をもすでに殺してしまっている。語り手の目の前に広がるのは，二種類ある人間のどちらとも殺した後の世界，もはや選択肢がなくなってしまった世界である。

エヴェンソン小説で忘れてならないのは残虐のさなかに突如あらわれる奇妙な笑いだ。夢の世界の理屈が現実を浸食するような独特の非現実感があり，そこに乾いたユーモアが生きてくる。『開いた幕』の最終章，錯乱したラッドの現実に，ウィリアム＝フーパーの殺人現場が時空を超えて二重写しになる場面で，小道具の黄色い付箋が活躍，ひそみ笑いを誘う。緊張が高まり笑いに最も不穏当な箇所に黒い笑いを仕掛けておくのがエヴェンソン流だ。

短編 "Killing Cats" はこう始まる。

"They wanted to kill their cats, but the problem was the problem of transportation. They invited me to dinner to beg me to drive them and their cats out to the edge of town so that they, the cat killers, could kill their cats."

ずいぶんとぼけた幕開けだが，わたしたちは「猫殺し」という語の繰返しに身構えてしまう。語り手は，自分は手を下さない，ガソリン代を払っ

© Kyoko Yoshida

てもらう，という条件で，猫と「猫殺し」の知人らを車に乗せる。このわずか4ページの短編の語りは奇妙な距離感に満ちている。飼い猫を殺す理由は述べられず，語り手と「猫殺し」らの関係もいったいどういう性質のものなのか判然としない。「猫を殺す」という行為そのものについても，自分には関わりのないことと決めこんでいる。そんな語り手の無表情な口調に読者も距離を置いて判断保留せざるをえない。

ところが最後のページになって状況が一転する。

傍観者を決め込んでいた語り手が，いきなり殺す側へ無理やり転換を強いられる。その反転の鮮やかさ，しらばっくれた「猫殺し」たちの声，そして哀れ猫たちの末路 —— すべてが完璧なタイミングで謀られたクライマックス。困ったことに，笑わずにはいられないのだ。つい笑ってしまった自分を呪う間もなく恐怖が訪れる —— 世界のどこかでいつもたくさんの猫たちが殺されている。怖いのはそこではない。重要なのは誰が殺すか。殺すのが自分でさえなければいいのだと，傍で見ていたわたしたちは語り手とともに痛感する。まるでそのことを確認するためだけのように猫は殺される。誰が手を下そうが，結局猫たちは殺されてしまう。

続いては犬に登場願おう。"Job Eats Them Raw, with the Dogs" は爽快に残酷で愉快な物語，ベケットやロバート・クーヴァーの世界と地続きだ。ここではすっかり骨ばかりになったヨブが野良犬を従えてどこまでも続く書割りのような西部の荒野を旅している。状況だけを追うとなんとも子供じみた残酷譚だが，聖書からそのまま出てきたようなヨブの大仰な嘆きの口調と，朴訥な西部訛りの木こりとのやりとりが珍無類で，極上の不条理漫才のよう。短編は旅のスナップショットのような乾いた短章からなっていて，ヨブの理不尽な災難が続々描かれる。でもヨブは不死身だから心配無用，骨がはずれてもまたはめれば大丈夫。唯一の心配はヨブがいったい何を「生で食す」ことになるのか，の一点である……。

『アルトマンの舌』 にはヨーロッパ趣味の短編も多い。"The Munich

© Kyoko Yoshida

Window: A Persecution" は一見明らかにオーストリアの巨匠 Thomas Bernhard のパスティーシュとして始まる[1)]。執念深く陰鬱で偏執的に理知的な語り手が延々と自分語りを展開する。改段はほとんどない。妻が次女を道連れに飛び降り自殺，長女も自殺未遂と，いかにもベルンハルトらしく救いのないお膳立てが整ったところで，語り手はミュンヘンの長女をしぶしぶ見舞いに行くのだが，次第に彼はベルンハルト的主人公とはまったく異なる病理の持ち主であることが明らかになってくる。すなわち，この父親は幼いころの長女を性的に虐待した上，妻を窓から飛び降りるよう仕向けたようなのだ。しかも自分が正しいことを一分も疑っていない上，長女が探し出した虐待の証拠写真を巧みに取り戻そうと画策する怜悧さも持ち合わせ，さらに長女に付添っている精神分析医を列車のトイレの中で撲殺してしまう。まさしく怪物なのである。主人公のおぞましさが，告白ではなく，絶え間ない自己正当化（しかも相変わらずのベルンハルト節！）によって明らかにされてゆく過程はスタイリストエヴェンソンの面目躍如，主人公の存在そのものに身震いしながらも，その語りのアクロバットに舌を巻く。長女の命運も気がかりだ。その上，そんなさなかにもやはり笑えるのだ。状況の珍妙さと語り手の過剰な自己愛が渾然となって生じる強烈なおかしさは，恐怖のスラップスティックとでも呼ぶべきであろう。

2004年に実験文学専門の FC 2 から出版された短編集 *The Wavering Knife* が，International Horror Guild の最優秀短編集賞を受賞した例に見られるように，ブライアン・エヴェンソンは，純文学とジャンル小説

1）エヴェンソンによるベルンハルト論は以下を参照のこと。
Bernhard, Thomas. *Three Novellas*. Trans. by Peter Jansen and Kenneth J. Northcott. Foreword by Brian Evenson. Chicago: U of Chicago P, 2003.

© Kyoko Yoshida

の境界をまたいで活躍するニューウェーブファブリスト[2]の典型，その中でもっとも知的想像力豊かで冒険的なおかつスタイリッシュな作家だろう。小説以外の仕事も活発で，毎年一冊のペースでフランス文学を翻訳しているほか，*The Review of Contemporary Fiction* の書評家も務め，クーヴァーの概説書[3]を出版している。またブラウン大学文芸科の自主出版の伝統にのっとり，「謎のスウェーデン人作家 Bjorn Verenson」による，同名の探偵が主人公の犯罪小説シリーズの「あらすじ」を手綴じ冊子で不定期に刊行中だ。次回作の長編 *Last Days* はホラー系出版社 Underland Press から 2009 年に刊行予定。新しい短編集もミネソタの Coffee House Press から出版されるそうだ[4]。

—— 吉田恭子

2）ニューウェーブファブリストのより詳細な定義，マニフェスト，作品例については以下の 2 冊を参照のこと。

Straub, Peter, et al. *Conjunctions : 39 : The New Wave Fabulists*. New York : Bard College, 2002.

Morrison, Rusty, and Ken Keegan, eds. *ParaSpheres : Extending Beyond the Spheres of Literary and Genre Fiction—Fabulist and New Wave Fabulist Stories*. Richmond : Omnidawn Publishing, 2006.

3）Evenson, Brian. *Understanding Robert Coover*. Columbia : U of South Carolina P, 2003.

4）最新情報については作家本人のウェブページ www.brianevenson.com を参照してほしい。

© Kyoko Yoshida